

聖地サンティアゴへ
フランス人の道 800 kmの旅

ひとり歩くスペイン巡礼路

今そこだけに広がる世界

高橋 克文
Katsufumi Takahashi

目次

はじめに..... 7

巡礼キーワード..... 8

1. プロローグ

何故 Camino スペイン巡礼？ - 10年越しの想い..... 9

1-1 2014年 秋：「スペイン巡礼路フランス人の道」との出会い..... 10

1-2 2018年 夏：40年ぶりの穂高..... 10

1-3 2023年 春：旅立ちの決意
色褪せてはいなかった Camino への想い..... 12

2. Camino

スペイン巡礼路フランス人の道 概略について..... 13

3. 旅の記録

May.7 2024 ~ Jun.22.2024..... 19

3-1 行程表..... 20

3-2 スタートの地へ..... 21

パリへ 12時間の滞在……そこは単なる通過点..... 21

美しいフレンチバスクの街 サン・ジャン・ピエ・ド・ポーへ..... 22

3-3 聖地サンティアゴ・デ・コンポステーラへ Camino 800km をゆく28

Stage I サン・ジャン・ピエ・ド・ポー ~ サンソル

140.2 km (Day1 ~ Day6)29

Day1 ピレネーを越えてスペインへ 著名アルピニストとの出会い.....30

Day2 パワフルで陽気な女性巡礼者達.....38

Day3 大都会パンプローナ 戸惑いのシエスタ.....41

Day4 「王妃の橋」のたもとで韓国人青年と二人酒.....45

Day5 日本人女性もなかなかのもの.....51

Day6 障害のある娘と父 二人の後ろ姿.....55

Stage II サンソル ~ ブルゴス

140.8km (Day7 ~ Day13)59

Day7 “Have you ever seen the rain (雨を見たかい)”60

Day8 美食の街ログローニョでバル巡り.....65

Day9 金言を授かる - “Camino just called me”69

Day10 ゴスペル調の讚美歌流れるミサ.....73

Day11 あっぱれジョアンナ.....77

Day12 小さな村のアルバルゲの夕食は宴会モード.....80

Day13 バスクを想う フランス人女性との語らい.....83

Stage III ブルゴス ~ レリゴス

155.0km (Day14 ~ Day21)89

Day14 感涙 アメリカの女性巡礼者が炊いてくれた銀シャリ.....90

Day15 薫風にポプラの綿毛舞う路をイスラエル人男性と.....96

Day16 メセタで風の歌を聴き夜にデンマーク人男性とジョニ・ミッチェルを歌う.....99

Day17 メセタ平原に伸びる一条の白い路.....104

Day18 サンティアゴまで400kmの標識に溜息.....108

Day19 そうだったのか……アシュレイの涙.....111

Day20 天真爛漫なスペインの子供達から質問攻め.....114

Day21	傍若無人な若者達の眩しさよ.....	118
Stage IV	レリゴス ~ ヴィラ・フランカ・デル・ビエルソ	
	150.9km (Day22 ~ Day29).....	123
Day22	レオンの夜 巡礼仲間と午前様.....	124
Day23	レオン大聖堂のステンドグラスに言葉を失う.....	129
Day24	あなたが HAYAO ね?.....	136
Day25	チョコレートが叶いそうにない夢を見させる.....	140
Day26	そんなことがあったのか…… ミーナの告白.....	144
Day27	御来光を仰ぎ見る気持ちは万国共通.....	148
Day28	赤い糸と言わずして何と言う?.....	153
Day29	無宗教って FREE なのか…….....	157
Stage V	ヴィラ・フランカ・デル・ビエルソ ~ サンティアゴ・デ・コンポステーラ	
	189.2km (Day30 ~ Day38).....	161
Day30	A Hard Day's Night…… 全ては自己責任.....	162
Day31	アンとホセアと.....	166
Day32	宿屋の主人とひと悶着.....	170
Day33	台湾人女性 2 人と 3 人部屋.....	173
Day34	スペインの雨は平原にしか降らないよ.....	178
Day35	スペインの若者で溢れる路の喧噪.....	181
Day36	“We still need supports” ウクライナ人女性との語らい.....	185
Day37	実はこれが自分の日常ではないか? それも悪くないな.....	188
Day38	ここだけの時間 空間 サンティアゴ大聖堂前広場.....	191

3-4 Camino の余韻の中を.....	201
6月16日 地の果てフィニステラ岬 & ムシアへ.....	201
6月17日 Good-Bye Santiago de Compostela.....	203
6月18日 バルセロナにて — 大都会の中の孤独.....	206
6月19日 リヨンへ — 南仏の小さな駅で.....	208
6月20日 リヨンからドイツ マイントツへ.....	211
6月21日 マイントツにて そして旅の終わり.....	213

4. エピローグ 219

別離と再会と 222

5. 巻末補足資料 225

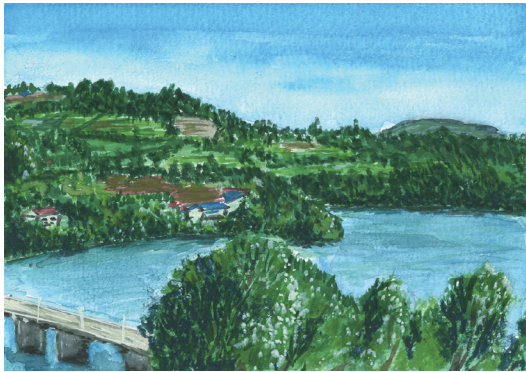
★サンティアゴ巡礼事務所作成 2024 年度データ 225

★事前準備について 227

★持ち物リスト 228

★旅を終えての事後情報：費用 / 気付き 等 230

謝辞（あとがきに代えて） 234



はじめに

本書は、定年退職した65歳の私が2024年5～6月に《Camino - スペイン サンティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼路フランス人の道》800kmを単身歩いた記録です。

帰国して数ヵ月を経た今も巡礼路で出会った数多くの人々、美しく変化に富んだ風景、通り過ぎた数々の街や村のたたずまい、目にした歴史的建造物などは色褪せることなく深く記憶に刻まれ、巡礼者同士で交わした「Buen Camino（良い巡礼旅を）」という挨拶が耳に残って離れることはありません。巡礼路を歩こうと心に決めて10年を経て実現したこの旅が残っていたものの大きさにあらためて気付いている自分が今ここにいます。

出発前はこの巡礼路歩きも所詮は定年退職した暇人の道楽旅であり《自分だけの旅》の記録として書き残すことは考えていたものの、ことさら広く第三者に伝えようとは少しも考えてはいませんでした。しかし巡礼路を歩きながら日本人巡礼者の少なさに寂しさを覚え、Caminoが日本で広く知られていないことをとても残念に思いました。

還暦をとっくに過ぎた老いぼれに大きな感動と幾つかの気付きを与えてくれたCaminoを瑞々しい感性を持った若者に、人生半ばで立ち止まっている人に、私同様に定年を迎え残りの時間に思いを馳せる人に知って欲しい、経験して欲しい。そう切実に思うようになりました。いつしかこの旅は《自分だけの旅》から紛れもなく《伝えたい旅》へと変わっていました。

Camino 巡礼路。そこには確かにそこでしか味わえない思い、感慨、時間と空間が横たわっていました。

本書を手にとっていただいた方々が一步を踏み出してくれたなら無上の喜びです。

巡礼キーワード

- **カミーノ Camino**

スペイン語で「道」 長じて巡礼路、巡礼旅を表す

- **サンティアゴ Santiago**

スペイン語で聖ヤコブ サンティアゴ・デ・コンポステーラ略称として使う

- **ブエン・カミーノ Buen Camino !**

「良き旅を」という巡礼者同士の挨拶 地元の人々からの激励

- **クレデンシャル credencial**

巡礼手帳 巡礼者のパスポートと言えるもので、道中の飲食店や宿泊施設で押したスタンプが歩いたことの証明となる。巡礼事務所や教会などで入手

- **モホン mojon**

巡礼者を導く道標 サンティアゴまでの距離が表示されている
これと併せて建物の壁、道路上に記された黄色い矢印により道に迷うことはない

- **アルベルゲ alberuge**

巡礼者の専用宿 公営のムニシパル /municipal と私営プリバーダ /privada とがある

宿泊には基本的には巡礼手帳の提示が必要で連泊不可

- **オスピタレロ Hospitalero**

アルベルゲの男性管理者

- **オスピタレラ Hospitalera**

アルベルゲの女性管理者

Prologue

1. プロローグ

何故 Camino スペイン巡礼？ - 10年越しの想い



1-1 2014年 秋 Autumn

「スペイン巡礼路フランス人の道」との出会い

数年前から会社での管轄部門が入社以来慣れ親しんだ営業部門から管理部門に変わり、馴染みの薄い不案内な業務内容と不慣れな社内調整に追われて鬱々とした日々を送っていた。まさしく“智に働けば角が立つ 情に竿差せば流される 意地を通せば窮屈だ”の境地。昇進を伴う移動だったこともあり上司、同僚や部下に愚痴をこぼすことも叶わず、誰にも心の内を明かすこと無く悶々とした日々を過ごしていた。

そんなある日、帰宅途中に立ち寄った書店で『人生に疲れたらスペイン巡礼』（小野美由紀 著 光文社新庫）の背表紙に目が留まった。“スペイン巡礼”ではなく“人生に疲れたら”のフレーズに引き寄せられて手が伸びていた。就職して間もない20代の著者がパニック障害になり、スペイン巡礼の旅に出て再生する記録である。800kmもの長い距離を歩き通す中でスペインの自然、文化に触れ、出会う人々と交流する様子に読み終わった時には“人生に疲れたら”ではなく“スペイン巡礼”そのものに強く惹かれていた。

1-2 2018年 夏 Summer

40年ぶりの穂高

大学時代に所属していた山岳サークル「岳文会」の先輩とふたりで久しぶりに北アルプス穂高連峰へ。岳沢～前穂高岳～奥穂高岳～涸沢～上高地のお馴染みのルート。歳を重ねるごとの己の体力の衰えには謙虚に向き合い戸惑うことはなかったが、前穂に登る重太郎新道上部でひるみ、学生時代には重いキスリングを背負い駆け下った奥穂から白出コルへの岩稜で足がすくみ「怖い…」と感じたことに少なからずショックを受けた。以前から痩せ尾根通過の時などでバランス感覚の不如意を自覚していたが、あらためて還暦を迎える我が身を振り返り、これから歳を重ねる先の「山」は